いつも両ページ刷つている、転場新聞〝坑外〟。月2回刊。内容・紙面ともなかなか豊かだ。

〝坑外〟と共に歩いて

―職場新聞活動における率直な意見―

四山指導部　村中利行

（1）

いま、手もとに確かな資料がないのでわからないが、一九六八年四月ごろ創刊し、なか二回ほど休んだのち、月一回発行を二回とし現在に至っている。

どこの職場分会でもそうだろうが、発行して持続できるか、どうかが話し合われ、編集委員が選出された。その中で確認されたことは、無理はしない、月一回発行を定着させよう。記事の重複（委員会、諸会議の報告）をさける。職場の声をなんでも聞き、広告ビラの裏でもいいから、簡単に書いてもらおう。という三点であった。

職場新聞をつくるという話が広がると、「新聞名を応募したらどうか、賞品は私が出すから」という仲間があり、応募のなかから「坑外」ときまったのである。

さて発行しかかると、原稿がなかなか集まらず、いきおい論文調の報告や集会の案内でうまってしまい、自分でガリを切りながら面白くない。本人が面白くないのに仲間たちが面白いはずがない。発行するだけでなく、内容が問題になってきた。

そこで婦人浴場のことを書いてみたらと思った。以前、婦人部長から婦人浴場の改善について職新でとりあげてくれという話があったのだが、原稿を書いてきて下さいと言って、そのままにしていたからだ。早速、職場で婦人部長に私たちは、自分の働く職場の改善、労働条件（保安・賃金）を調査することによって、いかに坑外職場の労働者が、どんな条件で、職場の改善をどうのぞんでいるかがわかると思います。

環境改善の要求にしても、ひとつの職場のことでも、みんなのものとして取り組んでゆかねばならないと思います。

すでに十月一日からの分離、第二会社化によって、坑外職場の合理化はさけられないのです。

合理化をはね返す力を、ここで発揮できるよう取り組みましょう。

▼…〝坑外〟NO・六六の記事の一つ。

×

梅雨も明け、毎日暑い日が続いています。昨年と変った点は、職場にウオータークーラーがついてつめたい水が飲めるようになったことです。

会うと、実状と要求事項を聞き、私が記事を書き、翌日読んでもらい新聞にのせた。さほどの反応もない。

今度は浴場の見取図をかき、眼でわかるように書いた。下請の親父さんが新聞をみて『よう、こげんか風呂にしんぼうしとるなー』といって、イップクの時間に話題になっていた。このことがあってから、婦人浴場はちくじ改善され、ほぼ要求どおりになった。

その後、職場環境の改善をめざし、トイレの設置をはじめ、手洗い場、休憩所がつくられていった。

（2）

職場のナマの声、身近かな話題をとりあげ、積極的に職新にとりあげていくことによって、新労の仲間たちからも、よく読まれる新聞になりだした。昨年、五十号発行を記念し、みんなで文集をつくり、ささやかではあるがイッパイ飲むことにした。このことを聞いた新労の仲間が、当日、酒と肴をとどけ、五十号の発行を祝ってくれた。五十号まで頑張ったという思いよりも、職新が読まれている新労の仲間からもはげましをうけているという喜びが、いっそうのはげましとなった。

職場新聞だから、報告や組合のビラみたいにむずかしく書くことなく、ありのままを書く。そこに〝合理化〟が具体的に現われてきているからである。それをバクロし、組織していくことで、要求の内容が発展していくのだと思う。原稿にしても、待つという姿勢ではなかなか集まらない。編集部員をはじめ分会役員がそれぞれの職場の話題をつかみ、つねに職新に反映させ、全体のものにしていくということが大切だと思う。

また、職新の内容にしても、新労、下請の仲間をはじめ、坑外に働く労働者が、親しみやすく、読まれる内容に心がけねばならない。三池闘争後、分裂した職場をいずれ私たちの手で統一を闘いとらねばならないという展望のもとに、地味ではあるが編集実務者はそうした職場の下地を職新活動によって作っていくことを肝にすえガリ切りをつづけねばならないと思う。

組合改選にともない職場でも改選が行なわれるが、なるべく編集部が変らず発行体制を維持するなかで、書く、ガリ切り、刷るという分担をつくり、各人が少しずつ力を出しあい、息の長い職新活動を続けねばならないと思う。

豆コント

戦後二十八年の成長
いちばん成長したのは私です
――物価

×

日銀券増発続く
とても信じられないワ
――赤字ママ

×

試膽会
奇型魚の食べ放題！
――幹事

女見日記

八月十五日に思う

港務新港分会　広松清香

毎日暑い日が続く八月。さるすべりの花が咲くたびに、私は二十八年前の夏を思い出さずにはいられません。サイレンの音に明け暮れていた毎日。当時小学五年生だった私は、身の回りの品物を小さなトランクに入れ、防空頭巾と救急袋を枕元において寝ていました。

幸い私の住む所は田舎だったので直撃は免れたものの、昼も夜もサイレンの響に怖えながら防空壕の中に逃げ込んでいました。そんな毎日も、八月十五日をもって終止符がうたれたのでした。

敗戦を聞かされた時、何ともたとえようもない複雑な気持だったのを憶えています。そんな時近所のおじさんから、「米兵が上陸してきたら、大人はみんな銃で殺され、子供は大きな犬の餌食にされるのだ！」、と聞かされました。恐怖におののいた私は、その夜米兵においかけられる夢を見ました。鬼のような顔をした大きな身体のアメリカの兵隊が、逃げる私たちを執ように追いかけてきます。私は近所の大きな邸の庭に逃げ込み、そこにあったさるすべりの木に登りました。

猿もすべるという木に、私はするすると登りました。敵は、私には気付かず走り去って行きました。

次の日も、その次の日も同じような夢を、三晩続けてみました。その時の恐怖心は、今でも忘れることができません。

うちの子供も中一と小五年生ですが、テレビの戦争映画を観ては、かっこよさだけをとらえて、プラモデルの戦争や飛行機で夢中で遊びます。私が戦争の悲惨さを教えても、実感として受けとめてくれません。そんな時今年の夏休みの原爆記念日に登校し、平和教育がなされたのは、おくればせながら有意義だと思います。

原爆被災者にくらべれば私の体験などくらべようにもなりませんが、戦争を知らない子供たちに平和のありがたさ、命の尊さを教えるのは私たち戦争体験者に課せられた問題ではないでしょうか。この気持を核武装阻止の運動に発展させ、そして一日も早く世界に本当の平和が訪れるのを願ってやみません。

連載

忠臣、高音忠之進

―死す

三川指導部　開田晃臣

連日の猛暑に小屋の中は日が落ちてもムンムンしていた。

私は目白に夕方の餌をやり飲水を入れ替えて、蒸し風呂のような小屋の中へカゴを移したが、またすぐ思い直して縁先の庇の下の涼しい所へ吊り直した。

この暑さでは目白が参ってしまうかも知れない、そう思ったからである。

蚊除けにと、風呂敷を二枚使ってすっぽりと目白カゴを包みこんだ。「目白も今夜は涼しい涼しいと喜んでくれるだろう」と、そんな軽い気持ちであった。

昏れてゆく軒先で目白カゴが風に吹かれてゆれていた。一雨来そうな気配がないでもなかったが、降っても大した事はないだろうとタカを括っていた。

夜中にふっと目が覚めた。風が雨戸に雨の粒をたたきつけている音がしていた。軒下の目白のことが気がかりではあったが、風呂敷であれだけしっかりと巻いておいたから、多分大丈夫だろうと思って、何時とはなくまた眠ってしまった。

翌朝、目が覚めた時には、風はほとんど止んでいて小さな雨が少し残っている程度であった。「目白はどうしているかな」私はすぐ目白を見に行った。ビッショリと濡れた風呂敷がカゴにピッタリと貼り付いていた。私は獲いを取るのももどかしく中を覗きこんだ。「アッ、目白が死んでいる」と、瞬間そう思った。

止り木から落ちて目白はカゴの底にうずくまっている。急いでカゴを下ろし、手を差し込んで底の目白をソーッと軽く握ってみた。

ピクリと、目白の動きが掌に伝わってきた。「生きている」思わず声を弾ませながら、取り出した目白を掌にのせてみた。

ずぶ濡れになっている羽毛は、体にピッタリとまつわり付いていて「目白って、こんなに小さな鳥だろか」と、びっくりするほど小さくて軽かった。

そっと立たせようと試みたが、脚も半ば曲げたままで立つことすらできず得ない状態であった。

「小屋の中へ取り込んでおけばよかったなあー」と軽い悔いを覚えながら炊事場に行き、コンロに火を入れてビショ濡れの目白を温めてやった。モゾモゾと掌の中で動いて、少しは元気を取りもどしたようでもあった。

「俺が帰ってくるまでには元気になっておれよ」、と心の中で話しかけながらカゴの中へ目白をもどして出勤した。

仕事を終えて帰宅してみると、目白はカゴの底にまんまるふくれて仰向けになりころがっていた。

「遂に死んだのか」、そう思い、取り出そうと握った掌にかすかな目白の温みが伝わってきた。足も一寸動かしたようでもあった。

「まだ生きていてくれたのか」私は掌の中の目白に、口移しに水を飲ませてやった。口の中でクチバシが二、三度かすかに動いたのが感じられた。

毎朝毎夕、餌をやり水を取り替え、育ててきた私の帰りを必死になって待ちわびていたような気さえして、いじらしかった。また、可哀想でもあった。

夕食のとき「目白、もうダメばい」と妻に言った。妻も「惜しかったねえー、高音までうつようになっとったのにねえー」と、しんみりした口調で言った。

夕食後、カゴをのぞいてみると案の定、目白は動かなくなっていた。

私は木れんの根元に、犬や猫がかき出さないよう深めに穴を掘り頭を西向きにして埋めてやり、板切れで小さな墓標を作って、それに「高音忠之進」と墨書して立ててやった。

生前よく高音でさえずり、私の心をなごましてくれたからである。名前の「忠之進」は、私が指先に戯せて差し出す虫を、何のためらいもなく安心し切って食っていたそのしぐさが、いかにも私に忠義立てしているように感じていたからである。

最初、戒名は忠太、忠吉などいろいろと考えてみたが、どうもヤクザくさくてパッとしない。忠之進、忠之丞など呼名になんとなく格式がある。そんな気がして「高音忠之進」とした。

忠臣、高音忠之進
安らかに寞すべし。
昭和四十八年七月二十九日

九月のくらし

○…一日は大正十二年のこの日関東大震災があった日で、防災の日。また立春から数えて二百十日に当たり、この前後に台風が多く上陸します。十五日は敬老の日ですが、老人にとっては〝怒りの日〟。東京では年金改善などを要求して集会が開かれます。十八日は一九三一年、日本軍による満州事変ぼっ発の日。二十三日が秋分の日です。

○…子どもの寝冷えの季節です。昼間よく遊んだ子どもは、夜寝返りをひんぱんに行ない、一晩五十回にも達するとか。とくに朝方の寝返りは親も気がつかずに寝冷えを起こします。腹巻きをするか薄い毛布を巻きつけておきましょう。

○…夏物の衣類はしまう前にもう一度洗たくし、とくにゆすぎをていねいに。夏のアクセサリーの手入れもお忘れなく。【連合】